

「柏崎の橋」

35 大門橋（野田）

市街地から国道353号線を南進し、野田コミュニティセンターの交差点で左折、旧野田小学校を過ぎた先に野田大橋が架かっているが、そこから数十m下流に架かっている緑色の橋が大門橋である。

「大門」は一般的には大きな門や敷地のいちばん外側にある門、正面入口の門を指すが、新潟県の方言では寺院や神社の前の道、または道路から家の出入り口までの通路を指す。この橋は浄土真宗願龍寺の正面側に架かるため、大門橋と命名されたと考えられる。



昭和47年被災した大門橋

(柏崎市史資料集 近現代篇3上より)

大門橋は大正14年の完工後、たびたび水害に見舞われている。昭和19年7月及び昭和21年7月に鵜川大洪水による流失した記録が残されており、昭和47年にも欄干が破損するといった被害を受けている。昭和55年、長さ36m幅2mの永久橋に架け替えられた。

願龍寺の方の話によると、昭和42年の野田大橋完工後、多数の原発工事関係車両が野田大橋を通行し地域住民の交通が危険になった時期に、市に要望して大門橋を整備してもらったという。



現在の大門橋。奥に野田大橋の橋脚が見える。

年代は不明だが野田大橋がない頃のお盆時期に、願龍寺ではご飯をたくさん炊いて檀家の人達を待っていたが、橋が水害で被害を受けて通られなくなってしまい、檀家の人達が来られなくなった。この話は、今でもお盆の時期に檀家の人達が願龍寺に集まった時には話題になるそうである。

野田地区は積雪の多い地域である。雪が欄干の高さまで積もっていても人々は野田大橋まで遠回りするのが大変なので、大門橋を這うようにして渡っていた。願龍寺が除雪機を購入した後は願龍寺の方が時折除雪し、その後、当時の区長の働きかけで融雪ホースにより雪を溶かすようになったという。

野田大橋架橋後も変わらず地域住民の大事な橋であり、現在も橋の中央にわたされた融雪ホースが、地域住民の交通の要所としての機能を冬期間守っている。

●参考にした本

黒姫この里で(224 ウエ) 植木昭吾・西須順作 編
新潟県方言事典 中越編 (882 ワタ) 渡辺富美雄 編
柏崎市史資料集 近現代篇3上(224 Kシハ)
柏崎市史編さん委員会 編